

中高年のための

## 海外旅行の楽しみ方と落とし穴

エッセイスト 近藤 節夫（会員）

### 一、旅行体験を楽しむ

いま中高年者に対してどんなアンケート調査をしても、最も大きな楽しみのひとつに海外旅行がランクアップされることは間違いありません。それほど海外旅行は中高年者にとって相変わらず魅力的であり、好奇心を掻き立ててくれるアイテムなのです。しかし、ただ海外へ出かけて楽しんだり、帰ってからアルバム鑑賞の世界に浸るだけではなく、これからはひとつの新しい楽しみ方として、個人の「旅」記録（私は自分の旅行記録を「個人ギネス記録」と称しています）を作ることにも目を向け、冒険旅行、個性的な旅、世界遺産の旅、その他旅行中の想定外の出来ごと、等の個人スクラップ図をお互いに作成して、仲間同士で比べてみてはどうだろうかと考えております。旅行体験がなお一層多面的、多重的に見えて、いやがうえにも旅の興味が倍加されます。

私は半世紀近くも前の学生時代に、日本中が興奮と熱気に包まれた「六〇年安保闘争」に参加したり、社会人となってからもベトナム反戦運動や、沖縄返還闘争にも関わって、自分の身体の中には「一意専心」と「正義感」がマグマとなり燃えたぎっていました。若いころには直情径行の「海外武者修行」を試みて、戦乱の地であわや？と思われる危機一髪の体験を一再ならず重ねてきました。それが、結果的には旅行業界に四〇年近く関わることになってしまいました。私の「海外ひとり旅」は危ないハッピーニングの連続でしたが、それがいまでは誰にも真似の出来ない自慢話として、その体験談を講義のネタに使うこともしばしばです。

いくつか例を挙げれば、ベトナム戦時下のサイゴン市内（現ホー・チ・ミン）で米兵に銃で威嚇されたこと、インドネシアの首都ジャカルタで強盗に襲われ、力づくで時計を強奪されたこと、アンマン市内でヨルダン軍兵士にライフル銃を突きつけられ身柄を拘束されたこと、スエズ運河でスエズ警察によりホテルの一室に拘禁されたこと、等々危ない体験のほかにも南アフリカの金鉱山で地底一七〇〇mまで潜ったこと、一九九九年夏トルコ大地震に遭遇したこと、海外で二度もホテル火災に遭ったこと、日本に居ては有り得なかったダイアナ王妃の死をアンピリーバブルにも死の前日（？）に知ったこと、等々の衝撃的で、珍しい自分自身の実体験を、前記の「個人ギネス記録」に記入しているのです。いつもこの図を見れば思わず頬が緩んできて、新たな珍しい記録？達成を目指して更なる闘志を燃やしています。

その当時はまったく意識していませんでしたが、例えば災いであっても、長い人生で何が糧となり道しるべとなるか分からないものです。それらを満載した一枚の図を話題として気軽に取り上げるだけで会話自体が大いに弾みます。現在の自分の活動はおろか、これからの活

動にも大いに役立てることが出来ると信じています。

中高年の方々も自分の自慢してみたい旅行履歴・記録を記入した、個性的な「自己旅行記録PR図」（個人ギネス記録）をぜひ作成してみてください。誰でも自慢に足る旅は、案外あるはずです。間違いなく次の旅への期待が膨らんできます。

## 二、中高年の海外旅行で心がけること

率直に言って中高年の方々ととり、若い人たちと一緒にになって同じように旅を楽しむことには不安や課題が多いと思います。いまさら若者と一緒に旅行するより、同じ時代に同じ境遇に育った、人生観も似通って価値観を共有する人たちとの旅行に目を向けた方がよいでしょう。

もう一点大切なことは、海外旅行は普段とは異なる非日常の世界に飛び込み、心身をリフレッシュすることが目的ですから、出来ればケチケチ旅行は避け、ある程度贅沢な旅行を楽しむことをお勧めします。

私は自分自身の体験から広く若者に「海外ひとり旅」を勧め、旅の真髄が「ひとり旅」にこそあることを充分承知して広く啓蒙しておりますが、ごく普通の中高年の方には「海外ひとり旅」はあまりお勧めしません。熟年の旅行スタイルとして、これまでの多様な人生経験の中から積み重ねられた知恵をスマートに活かして、気の合った仲間と一緒に旅行される方が、気楽に、思う存分旅を楽しむことが出来るような気が致します。そして、ある程度旅行前に訪問都市について研究した結果が、中高年の人たちに得をしたような気にさせる、充実した旅を可能ならしめるのです。その点を斟酌して些細なことですが、以下に心を留めてください。

### ① 現代風若者とは一緒に旅をしない。

前段で触れましたように、若者と一緒の旅行は最初から mismatch と言ってもよいと思います。年齢差があまり大きいと、育った時代と環境が違い過ぎて、どうしてもお互いに話題が合わず、お互いに気を遣い、相手の欠点や不躰ばかりが目について、取るに足りないことでもトラブルの原因になりがちです。話し方が気に入らない。服装が気になる。声が大き過ぎる（小さ過ぎる）。動作が速過ぎる（遅過ぎる）。ひとつひとつの動作とか所作が気になるものです。なにもお金を払ってまで不愉快を背負い込むことはありません。

### ② ホテルでは家族との同室以外はシングルルームを利用する。

いくら仲の良い友人同士でも、丸裸の同室内では、それまで気がつかなかった相手

の些細な癖や欠点が妙に気に触るものです。欧米では同性同志が同室ですと、ホモとかレズと誤解を受けることもあるくらいです。案外無頓着な人が多いのですが、家庭環境が違うだけで性癖も大いに異なります。同室ではお互いのプライバシーも守れません。気遣いと遠慮ばかりが先立って存外ストレスが溜まります。追加料金を支払ってでも個室を予約することをお勧めします。

### ③ おしゃれを楽しむことに気を遣う。

中高年の旅の計画におしゃれとスマートさはとりわけ大切なことです。気持ちは若く豪華なドレス、明るくお洒落なスーツなどを用意して、TPOに合わせて着こなしてください。洒落たパーティや素敵なディナーをたくさん設営して、とっておきのお召し物を身に付け、周囲にも溢れんばかりの幸せをおすそ分けしながら、リッチでセレブの高揚感を満喫してください。特に、これまで専業主婦を通してきた女性は、案外親戚や親しい友人の結婚式以外に、豪華な自前の衣装を着る機会がありませんでした。海外旅行は改めて自分をデビューさせる良い機会だと考えてください。ぜひ箆箭の奥へしまいこんだ高価な衣装を取り出して、異国の地で外国人に見せびらかせてください。彼らから「ブラボー!」「ワンダーフル!」の声が浴びせられることは必定です。

ただし、場所柄を考えず調子に乗って大声や嬌声を発つすることのないよう心得ましょう。

さらに具体的に五点付け加えれば、

### (一)、激安ツアーはよく考えよう!

どんな商品にも相場価格というものがあります。時には、掘り出し物を見つけたとか、特別ルートでお買い得品を買ったというおいしい話があります。しかし、閉店セールや質流れのような特殊なケースを除いて、激安商品が早々あるわけがないことは常識的にも分かるのではないのでしょうか。凶商品とか、粗悪品の類には引っかかりからないよう気をつけたいものです。

旅行商品にも時折首を傾げざるを得ない激安ツアーが販売されますので、充分中身を調べて、旅行業界の詳しい人に聞いてみるのもひとつの知恵です。

最近の事例を挙げてみましょう。○六年一〇月、トルコ国内で日本人ツアー客に死傷者を出したバス横転事故は記憶に新しいところです。バスのスピード超過による自損事故です。マス・メディアは、雨中にスピードの出し過ぎが事故の原因と分析し、一様にバス会社の責任説を報道していました。確かに過剰スピードが事故の一因であ

ることは間違いありません。しかし、このケースでは、その奥に隠れがちの旅行会社の安易なツアー企画と販売方法、そして販売価格算出の根拠を精査してみる必要があります。降雨、超スピード、アスファルト道路とあれば、当然車はスリップ事故発生の可能性が極めて高くなります。これだけの悪条件が重なれば、常識的には現地旅行会社、バス会社、旅行企画会社はよほど走行に注意を払う必要があります。ところが、途上国などでよく見られる現象ですが、知ってか知らずか老朽化したバスのタイヤ摩滅をそのまま見逃しているケースが多いのです。驚くほど古いタイヤでバスは走行し続けているのです。一雨来れば間違いなくスリップ事故につながります。さらに百万km（地球二十五周）以上走行しているバスはさらにあります。タイヤ以外にバスの車体自体が疲弊しているのです。仕入れ価格が安いために、現地業者側が激安ツアーには整備された新しいバスを回してくれないからです。危なっかしくてとても乗ってられないのが本音です。精々スピードを出さないようにドライバーにお願いするだけです。添乗員が注意して常にタイヤの磨耗とスピードの出し過ぎをチェックしていません。いと事故につながる恐れがあります。基本的には、仕入れ価格の安さが事故を招いているわけですが、こればかりは、現地で自分が思うようにチェックするわけにも行きません。すべてがこうだというのではなく、全般的にこういうカラクリになっているのです。

旅行業界では、二年前にも別会社が企画した格安ツアーが同じような事故を連続して引き起こしました。エジプトのアレキサンドリアで一カ月内に同じ場所、しかも同じような雨の中、同じ条件下で二度も同じようなバス横転事故を起こしました。いずれも私の見るところ、バスのタイヤに問題があります。当時私は本件の事故原因について旅行会社の責任を追求した小論を旅行雑誌に寄稿しました。それに対して旅行会社から反省の声は一切なく、拙稿の指摘をまったく無視した挙句に、あるうことかこの旅行会社は、同じ月内に遥か離れた南米ペルーのマチュピチュで、またもや同種のバス横転事故を引き起こしたのです。

宿泊ホテルにしても、安いツアーには安いなりのホテル、つまり設備が不十分でサーヴィスが行き届かず、治安上問題のあるホテルが手配されている可能性があることをあらかじめ承知しておいてください。

それにしても安いツアーには落とし穴があることを重々弁えてください。旅行会社は安全、信頼感、責任、倫理感のある会社ばかりではありません。

## （二）滞在する【ホテルの選定】にこだわる。

中高年者には、四ツ星ホテルに滞在することをお薦めします。可能なら歴史的に由緒のあるホテル、例えばシヨパンが泊まったマヨルカ島のホテルとか、ロールス氏とロイス氏が合併調印して、新生ロールス・ロイス社発足の基点となったマンチェスタ

―市内のホテル、あるいは世界遺産・イグアス滝の前のホテルのような、それなりの伝統と格式のあるホテルで、その土地ならではの個性的で「臨場感」が味わえるホテルがよいと思います。それらのホテルは敷居が高いからと尻込みすることはありません。ちよつと奮発すれば誰でもが気軽に泊まることができます。更にホテルライフをもっとエンジョイすることも考えてみてください。いままで抱いていたホテルのイメージを一八〇度転換させて、ホテル内で過ごす時間をもっと増やすことです。ホテルは朝食とただ眠るためのスペースではありません。もっと有効に利用すべきです。滞在期間中は部屋を借り切ったオーナーですから、ホテルライフをわがままに自由に満喫しながら、ホテルの付属設備や施設を思い切って使ってみることで。極端に言えば室内ではルールに反したり、器物損壊さえしなければ、何をしても許されます。素っ裸で逆立ちしても結構です。豪華なロビーでとっておきの衣装をまとい、日本から持ち込んだ愛読書を読みながら目の前を通り過ぎる美人ゲストの品定めをするのも自由です。欲を言えば、最低でも三ツ星ホテルが望ましいところです。これならサーヴィス、清潔感、居心地の良さ、想い出、防犯等の点でまず問題ありません。一流ホテルであればあるほど、ロビーをはじめ、ホテル全体の雰囲気も高級感が溢れていて、ゴージャスな気分になります。スタッフもよく教育され、微笑みを欠かさず親切で、何ごとにもよく気がつき、滞在中は優越感にも浸ることが出来ます。別次元の世界へ迷い込んだような気分になさしてくれます。これこそホテルが非日常の寛ぎの場として目指すところです。

### (三)、旅行先の都市・土地が舞台となった【大河小説】を読み込んでおく。

「モンテ・クリスト」のパリやマルセイユ、「復活」のシベリア、「風とともに去りぬ」のアトランタ等は、事前に読んでおくの旅が一層味わい深くなる、その典型です。感じた通りの印象と残影を頭の片隅に収めたまま時代背景や、時代考証を思い浮かべながら街頭を散策していますと、原作と同じ名前を冠した建物や路地が発見出来て、往時の舞台が髣髴として甦り、気持ちが高揚してきます。つい自分が主人公になったような気持ちにさせられます。帰国後にその名作ビデオでも観て、「臨場感」を込めた印象と想い出をまとめられれば、観光大使になったつもりで、その都市について自信を持って語ることも出来るようになります。

### (四)、旅行前に行ってみた場所、施設をリストアップして、自由時間に訪れてみる。

観光名所、知られざるプチ美術館、市場、学校、コンサート、スポーツ競技、動物園、等々存在理由のある土地の建物、イベントなら何でも結構です。籠の中の鳥にならずに、土地の人たちと触れ合うチャンスを作ることが重要です。目的地へ行く交通

手段も自分なりに調べ、出来るだけ既存の【公共交通機関】を利用すれば、その都市の大体の輪郭も分かってきます。狭いヘルシンキ市内では、市電で市内を一周すれば、土地の人々と一緒に車窓から一時間程度で市内を安く楽しく見学することが出来ます。ニューヨーク、パリ、ロンドンなどの大都市の地下鉄もいかに実用的で、長い間に亘って多くの市民に愛され利用されてきたかということも納得させられます。地下鉄、路面電車、市内バスのような公共交通機関は、案外経費的にも、地勢的にも手短にその土地に馴染むひとつの方法とも言えます。

実際こんなこともありました。何年か前にロンドンの動物園からの帰り道で地下鉄の駅から道路へ出たとき、通りかかった年老いた夫婦から道を尋ねられたことがあります。多分土地っ子に間違えられたのではないかと内心ニンマリしたものです。

### ⑤、【国際人】になろう！

「国際人」といっても、必ずしも外国語が喋れるとか、外国人の友人がいていつも外国と交流している人のことをいうわけではありません。端的に言えば、国籍には関係なく「相手の気持ちが分かる人」を指すのです。こちらの言い分ばかり言って相手の気持ちや、意見を斟酌しようとしてもしない人は、いくら外国語が話せても国際人の仲間入りすることは出来ません。さらに言えば、いつも笑顔を絶やさない人が国際人に近い人と言えるかも知れません。かつて、アメリカ政府高官が日本の外交官にどんな人を望むかと聞かれて、即座に「笑顔が好人」と応えました。外交交渉に長けた人より、まず笑顔の好い、感じの好い人が何ごとにも勝るということを示しているのではないでしょうか。そんなことを考えますと、果たして日本の外務大臣の笑顔はいかなものかと考えてしまいます。

昨今の日本人の品性のなさを見聞するにつけ、エチケットやモラルの面ではとても欧米諸国の国際人に及ばないことを痛感します。折角外国へ旅立つのですから、ぜひとも国際人として行動し、あちらの国際人からも「国際人感覚」を学び取って欲しいものです。きつと視界が大きく開けてきます。

### 三、身の回りの環境変化に注意！

せっかくの楽しい旅から一転して地獄へ突き落とされるのが、旅行中の思わぬハッピーニングやアクシデントです。防ぐことが出来ない天災地変や、もらい事故等の不可抗力は已むを得ませんが、ちよつと気をつければ防止出来たはずの事故がいまも後を絶ちません。外務省の公式発表（〇六年三月）では、二〇〇五年度の旅券紛失届出数は過去最高に上りました。これだけ、海外旅行が普及して事故防止に関して注意を喚起されていながら、同じような事故は減少するどころか、その反対にむしろ増加しているのが実態です。

その原因のひとつは、旅行先で自分の身の回りの環境変化を軽視することに起因しています。海外旅行者には、気象条件が土地によってその内容と質が大きく変わるとの認識程度は最低限持つてもらいたいものです。一般的に「気温」の変化についてはある程度認識し、それなりの備えをしているようですが、「湿度自体」と「湿度の変化」に関しては、ほとんどの人が気にも留めていないようです。実は、ここに大きな落とし穴があるのです。身近なお酒にたとえてみますと、湿度の差によりお酒の味が変わります。アルコールの味は湿度の変化によって大きな影響を受けるのです。その土地の湿度にあったアルコールこそが、大吟醸と呼べる美酒を造り出してくれるのです。日本酒はわが国の多湿の温帯気候に適合したアルコール度と蒸留の按配により醸造酒として仕上げられるものなのです。一方、ワインは湿度の少ない乾燥した気候に合ったヨーロッパや同じ気候風土が造り出したアルコールです。いくら最高級の日本の大吟醸酒といっても、空気の乾燥したヨーロッパで飲んで決して滲み出る日本酒の味わいは嗜めるものではありません。日本のような多湿度の土地で嗜んでこそ旨味を味わえるように、醸造されているのです。世界中どこでも地酒が美味しい理由はこの辺りにあります。

また、厳しい冬の気象とか、爽やかな夏の気候というのは気温より、湿度の少なさに影響されることはよく知られています。例えば、大陸性気候で乾いた空気のヨーロッパ大陸や北米大陸では、日本の湿った気候に比べ、冬季の同じ気温であっても遥かに厳しい肌を刺す寒さになり、外部に露出している皮膚はうっかりするとすぐ凍傷に罹ってしまいます。北欧諸国や、ロシアの人々が厳しい冬の間は外出の際に暖かそうな外套と、耳と顔を寒さから保護する帽子を被っている姿を思い浮かべることと思います。そういう特徴をよく理解することも旅の心がまえで大切な点です。

人間の脳と身体はすぐには周囲の自然環境に適応出来ず、外的環境の変化に対して敏感に溶け込めないのはごく当然です。出来るだけそういう点を意識して、環境に適った準備と対応策を取るように行動しなければなりません。気象条件の異なる外国の地へ第一歩を踏み出した瞬間、事前準備と対応の遅れにより旅行者の意識がしばし朦朧とすることがあります。頭では分かっているつもりでも脳神経のバランスがすぐには順応しないということをよく理解していなければなりません。

もうひとつ、日本人旅行者が被害に遭いやすい原因は、日本人の生活習慣に根ざす安全に対する盲目的な安心感と、もともと現場に漂う「LIVE」の臨場感が希薄なことから来ています。それは、近年とみに世の中が殺伐として、他人への不信感とか、無関心、閉鎖社会という冷めた言葉が流布される一方で、まだまだ日本人の心の奥には、垣根やカギのない社会構造が意識として残っているからです。よく言えば、古来日本人がお互いに有する相互信頼感、つまり固有の美德がはしくもマイナス面で表れたという点で決して恥じるものではないのです。しかし、今日の社会、また日本とは異なる国々の社会通念では、残念ながら日本の美意識はオールマイティではありません。そこに古い日本的価値観を持つ日本人旅行者が気持ちの緩みから足元を掬われる下地があるのです。

特に、日本人旅行者にとって弱点となっているのは、あまり意識していなかった「臨場感」に対する希薄な意識、もつと言えば「臨場感」の欠如です。周囲から自分の懐が狙われているという、現場における危機意識が乏しいのです。こればかりはいくら口酸っぱく注意しても糠に釘です。実感として分りにくいからです。例えば、ビュッフェで、バッグを椅子の上に置いたまま不用意に席を立つ人をよく見かけます。何度注意してもうっかりやってしまうのです。下心ある輩にとつて千載一遇のチャンス到来です。これなどは他人を警戒しない普通の生活意識で、つい仲間から声をかけられるとそのまま疑うことなく、すつくと立ち上ってしまう島国日本人独特のDNAのせいなのです。

これは明らかに危機意識を駆り立てる臨場感が欠けているからです。現地へ何度も足を運び、その土地に漂う空気を、厳しく直に肌で感じるものが大切です。例え「臨場感」で感じることが難しくても、それを自分の皮膚感覚で感じようとする気持ちを失ってはなりません。現場には「LIVE」が産み出す歓喜、失望、悲哀、興奮、匂い、言葉、風、危険等々、その時点における現実そのままの空気やムードが満ち満ちています。危険な空気は現場でこそ感じ取ることが出来ます。そのためには、日頃から現場に身を置いて五感で汗と匂いの「臨場感」を嗅ぎとる気持ちが欠かせません。「まがいもの」ではなく、いつも「本物」を見たり、「LIVE」に触れることによって、平素から本物を見透し、現場に漂う「臨場感」を掴み取る鋭敏な鑑識眼を養っておくことが大切です。

#### 四、体験からつかみとった「臨場感」

ジャカルタで不意に強盗に襲われたとき、実際のところまだ「臨場感」が実感としては分りませんでした。翌年戒厳令下のアンマン市内で十数名のヨルダン兵に包囲され、身柄を拘束された時も、その当座はあまりぴんときませんでした。しかし、胸元にライフル銃をつきつけられている間に少しずつ恐怖感が募ってきました。身体が悪寒を感じたように内からガタガタと震えてきました。まずいことになったと一瞬後悔しました。それ以降しばらくの間外見上強がっていても気持ちは、恐怖感と警戒心でいっぱいでした。しばらくして、その恐怖感をセーブする方法として、少しずつ現場にはびこる「臨場感」という魔物に気をつけるようになりました。じつと神経をそばだてていると、何となく「危険な風」のようなものを感じるようになったのです。幸い旅行回数を重ねるごとに、いろんな角度から徐々に「臨場感」を学ぶことが出来たように思っています。その「臨場感」の習得によって、私は何とか恐怖心を克服出来るようになりました。警戒心をまったく抱かない知人と一緒に旅行したとき、私なりの「臨場感」によって、未然に知人を被害から守ってやることも出来ました。

旅を重ねるごとに要注意の黄信号は、身体が自然に「臨場感」を感じてくれるようになりました。もう絶対襲われないぞと妙な自信のようなものも芽生えてきました。現場における危険な予兆とは、目に入る武器や、強圧的な恫喝、親切ごかしの猫なで声ばかりではなく、耳に入る音とか、肌感じられる風、そして漂ってくる匂いとか、何よりも土地の人びとの

視線や息づかいなのです。これらは現場で神経を研ぎ澄まさなければ分からないものばかりです。それを注意力ともども疑似体験を積み重ねることによって、リスクを感知するアンテナを確信にまで高めていく気持ちと警戒心を忘れてはいけません。

「臨場感」について、さらにもう一言付け加えるなら、「人」「動物」「気象感覚」「匂い」「音」「風」のないところに、「臨場感」はありません。

長い人生経験を経た中高年の方々には、出来れば経済的な余裕と現在の健康体を、残された「自分だけの人生」の最大の楽しみである旅行のために使って欲しいと願っています。いくら年齢を重ねても海外旅行ほど投資の対価として、自分にプラスして還ってくるものほかにはないと思うからです。

思う存分エンジョイし、そのうえで目的を究められるユーティリティな世界、それこそが「旅」であると思います。許される限り誰でもがいつまでも素晴らしい個人の旅にこだわって欲しいと願っております。そのためにも嫌な思い出だけは持たないように、容易周到な心配りと「臨場感」の習得に努めていただきたいと願っております。とりわけ中高年の方には、気力、体力の続く限り、旅行先進国のホテルマンからも、洒落てスマートな日本人だと脱帽されるような、優雅な所作、作法、身だしなみを漂わせながら、事故に遭わないで素敵な旅をいつまでも続けていただきたいと念願しています。

(NPO法人「ワールドステイクラブ」講演抄録を加筆修正)